

## 国語

以下で引用している問題は、すべて2024年度前期入試の問題です。

著作権の関係で国語の入試問題原本は掲載できませんので、可能ならば書店や塾で入手してください。

来校いただければ、本校の『入学試験問題集（2022年度～2024年度）』を差し上げます。

例年の入試説明会で、国語科からお話しているのは以下のことです。

- 読解と表現との二本柱を立て、長文をじっくり読み通すこと、自らの考えを記述して答えることを重視しています。
- 小説の主人公の人物像や行動を読み取ることは、読者である私たちの生き方や経験にかかわっています。日頃から小説など数多くの文章を読む中で、人の心の動きや考え方について学ぶようにしてください。
- 漢字の書き取り問題： 残念ながら、字体が乱れ、読めない漢字を書く人がいます。とめ・はね・はらい・文字の形をきちんと意識して、ていねいに書く練習をおこなわないでください。いかげんな文字には点数を与えません。
- 選択肢問題： 内容読解の問題では、傍線部周辺の数行程度しか見ないで答えている人が多いようです。全文をしっかりと読み通すことが、どの問題を解く上でも基本になります。
- 記述問題： 読むことに十分な時間をかけて、ていねいに考えて書いてください。とくに解答欄が大きい問題は、読み取って考えたことを、自分の言葉で存分に書いてほしいと思います。傍線部の前後の引用だけですませたり、自分勝手な思い込みでストーリーを作ったりしてはいけません。記述問題の配点は、全体の半分以上を超えることもあります。自分の言葉で書いて表すことをよく練習してください。それには、文章を自分の頭と心でしっかり読み通すことが絶対必要なのです。

では具体的に、2024度の前期入試問題で上記の注意点を説明したいと思います。

2024年度の前期入試では、芥川 龍之介（あくたがわりゅうのすけ）の『鼻（はな）』という小説を出題しました。1916年（大正5年）に発表された古い作品です。現在活躍する作家の作品だけではなく、文学史に残る作家の作品もぜひ読んでもらいたいと考えています。古今を問わない幅広い読書経験を積むことで、優れた文章に多く触れ、豊かな感性をはぐくんでもらいたいという本校の国語科からのメッセージです。また、古い文章の文体にも、ある程度は慣れておいてほしいと思います。

設問については、本文の内容を正しく読み取る力を問うものだけではなく、問十二のように、本文を理解した上で、類似したそれぞれの表現の意味を考えて、示された解釈を選び、さらにその内容や根拠を自分の言葉で説明するという問題もありました。正解を求めるという姿勢は

もちろん大切ですが、根拠を示しながら自分の考えを説明するという姿勢も本校では重視しています。日頃の読書など文章を読むときには、内容や表現について「どういうことなんだろう」「なぜなんだろう」という疑問を持ちながら、それを自分の言葉で説明するという練習もしてほしいと思います。

もちろん本文の丁寧な読解も大切です。ここでは、問七を例に挙げて、説明したいと思いません。

まず傍線部⑥にいたるまでの話の流れを確認します。長い鼻に悩む内供は、鼻を短くする方法を自分で探しては試していましたがいっこうに効果が出ませんでした。また自尊心の強い内供は、鼻のことで悩んでいることも、鼻を短くする方法を探していることも弟子達にはさとられないようにしていました。ある年の秋、弟子の僧が知り合いの医者から鼻を治す方法を聞いてきた。しかし、それを知った内供は「いつものように、鼻などは気につけないというふうをして、わざとその法をすぐにやってみようとはいわずにいた」のです。

それはなぜでしょうか。おそらく先に述べた高い自尊心のためだと思われます。ひたすら浄土を追い求める修行の身でありながら、長い鼻ごときに振り回されて思い悩んでいるということを弟子達には知られたくなかったからでしょう。でも一方で「気がるな口調で、食事のたびごとに、弟子の手数をかけるのが、心ぐるしいというようなことをいった」のです。弟子の僧に鼻を持ってもらいながらいつも食事をするというのは手数をかけることでもあり申し訳ないという態度を見せることで、弟子の方から、鼻を短くする方法を試しませんかと言ってくれるのを待っていたのです。

ところが、弟子達の僧も日頃から内供の悩みをそれとなく知っていたので、この内供の「策略がわからないはずはない」のです。ただ、そういった内供の見えすいた発言に対して「反感よりは、内供のそういう策略をとる心持ちのほうが、よりつよくこの弟子の僧の同情を動かした」とあります。そこで傍線部⑥にあるように「弟子の僧は、内供の予期どおり、口をきわめて、この法をこころみることをすすめた」のです。もちろん内供の方も「このねっしんな勧告に聴従することになった」のでした。

設問は、なぜ弟子は「すすめた」のか、その理由を説明するというものでした。その問いの直接的な理由は、傍線部の直前にあるように、「内供のそういう策略をとる心持ちのほうが、よりつよくこの弟子の僧の同情をうごかした」からでしょう。つまり策略をとろうとする内供の気持ちを察したからこそ、この弟子の僧は内供に同情したのです。では弟子の僧は内供のどういう気持ちを察したのでしょうか。

先に見たように、内供は鼻を短くする方法を探していました。ですから、この弟子の僧の方法をぜひ試してみたいという気持ちがあったでしょう。ただ、それを言い出せないのは、内供の自尊心のためでした。僧である自分が鼻を心配することが悪いと思っただけではなく、むしろ「じぶんで鼻を気にしているということを、人に知られるのがいやだった」のです。ですか

ら、堂々と弟子に鼻を短くしてくれとは言い出せなかったのです。しかしこの弟子はそういう内供の気持ちを理解していたのです。そういうこともあり、内供が、食事の度ごとに弟子に迷惑をかけるのが心苦しいということを使うことで弟子の方から直す方法を試させて下さいと言ってくるのを待つという、とても回りくどい方法も、弟子にとっては、むしろ「同情」をひくものであったのです。長い鼻に悩んでいることと、それを言い出せないことの間で葛藤しているのが弟子にはわかったからこそ、内供をいじらしく思いあえてその策略に乗ってあげようと思ったのでしょう。それは回りくどい方法をとることへの「反感」よりもまさるものでした。

これらの内容を整理すると、

弟子は ・内供が心の中では鼻を短くする方法を試したがっていること

- ・試したいと内供が言い出せないのは、自分が鼻を気にしていることを弟子に悟られたくないという自尊心のためであるということ

を理解している。だからこそ、

- ・内供の回りくどいやり方には反感をもつことはない
- ・むしろ、内供にいじらしさを感じ、何とかしてあげたいとさえ思っている

ということになります。設問にあてはめて答えるならば、弟子がなぜ「すすめでした」のかという問いに、内供にいじらしさを感じ、何とか彼に寄り添いたいと思っているから、という内容が答えの中心となります。そして、さらにいじらしさを感じる理由をさらに追っていくと、先の整理した内容が出てきます。それらをまとめればよいのです。

ここで、答案を書く上での注意をあげておきます。

いきなり理由を説明するのではなく、まず傍線部がどういうことを言っているのかを考えましょう。例えば「策略」という言葉。この場合、内供のまわりくどいやり方を指しています。それを説明するだけでも他の答案と差が出ました。あわてず、傍線部が何を言っているのかを考えることが大切です。次に、本文に沿って説明したいのは分かるのですが、そのことが何を言っているのか、自分の言葉でおぎないながら説明する必要があります。本文を写しながら具体的に書けていても、それが指している内容が示されていなければ、説明したことにはなりません。

その他にも、指示語の指示内容を説明したり、例えた表現をわかりやすく言い直したりという工夫も必要です。相手にきちんと正しく伝えたいという思いを持ちながら解答して欲しいと思います。

今回の入試では、国語の答案全体で、何も答えが書いていない答案というのはほとんどありませんでした。それほど受験生は真剣にこの問題に取り組んでくれたと思います。むしろ時間が余ったという受験生も少なからずいたのではないのでしょうか。そういうときは自分の作った記述問題の答案がきちんと伝わる文章になっているか見直すことが大切です。見直していれば、先に述べたような説明不足や文章のおかしさにも気づくと思います。あまった時間の使い方も大切です。

その他、解答の形式に注意できていない答案も見られました。

例えば、気持ちを問う設問であるにもかかわらず、「〇〇という気持ち。」と答えられていない答案が一定数見られました。実際に問題を解く練習をするときには、「何が問われ」「どのように答えなければならないか」を常に意識しながら取り組むようにしてください。

また、漢字の書き取りについても注意が必要です。一画ずつ丁寧に書くようにしてください。漢字は語い力です。一つひとつの漢字は知っていても、それらを組み合わせた熟語になると分からないということはないでしょうか。様々なジャンルの文章を読んで、たくさんの語いに触れて下さい。

最後に。

今の自分にはない考え方や価値観、文体に出会えるのが、小説を読む醍醐味だいごみです。そうした「読書経験の差」は、試験の場で目にする作品に対応する力として現れてきます。ぜひ多くの作品に触れて下さい。